

# Comenius の方法世界

—— 教育方法意識とその基層 ——

佐藤 良吉

## 目 次

- (1)主著の意義(→意義(⇨)影響 (2)主著に対する批判(→批判(⇨)視座 (3)教育による人類の救済(→人類の破滅(⇨)「神」の嘆き(⇨)教育努力 (4)青少年期教育の必須(→現実(⇨)助言の切要(⇨)要請と提言 (5)教授学の探究(→教授技術の重要性(⇨)従前の工夫 (6)教授学原理(→教授学の確立(⇨)原理

### (1) 主著の意義

(→)意義 Comenius の主著、「大教授学」(「Didactica Magna」)の持つ第一の意義は、主著が西洋第十七世紀、教育史上、最初の体系的、組織的著作としての地位を、占有していたということのうちにある。

事実、そのことはすでに、教育史家 チェグラーもこれを認め、Comenius 自身も、「統一への努力が、自分の中心点であった」と述べているほか、何よりもそれ以上に、主著三十三章にわたる、以下各章の章題にてらしてもうなづける。

第一章、人間は、被造物のうち 最高の・最も完璧な・最も卓越したものであること。第二章、人間の・窮極の目的は、現世のそとにあること。第三章、現世の生命は、永遠の生命への準備にほかならないこと。第四章、永遠への準備には三つの段階があること。自分自身(とともにあらゆるもの)を 知り 支配し 正しく神に向けることがそれである。第五章、あの三者〔学識 徳性 神に帰依する心〕の種子は、自然的に私たちの中にあること。第六章、人間は、人間になるべきであるとすれば、人間として形成されなければならぬこと。第七章、人間形成は、人生の・最初の時期に行なわれるのが最も適切であり、またこの時期を失しては 行なわれないこと。第八章、青少年は 一緒に形成しなければならず、学校が必要であること。第九章、男女両性の青少年全部が 学校の手託ねられなければならぬ

いこと。第十章、学校での教育は、普遍的でなくてはならないこと。第十一章、本来の目的に完全にこたえる学校は、今までに存在しなかったこと。第十二章、学校は、改革して改善できること。第十三章、学校を改革する基礎は、あらゆる面での・精密な秩序であること。第十四章、学校の・精密な秩序は、自然から借りなければならぬこと。まことに 自然からかりた秩序は、いかなる障害物も おしとどめることはできない。第十五章、命数を長くする諸基礎。第十六章、教授および学習の全般的要件。いいかえれば、教授および学習が的確に行なわれて 成果が生ぜずにはいないようにする方法。第十七章、教授と学習との平易をえる諸基礎。第十八章、教授と学習との着実をえる諸基礎。第十九章、教授のさいに 僅かな労力で敏速をえる諸基礎。第二十章、知識の教授方法について。各論的に。第二十一章、技術の教授方法。第二十二章、言語の教授方法。第二十三章、徳行の教授方法。第二十四章、敬神の心を注ぎ込む教授方法。第二十五章、真のキリスト教の・真の規準にしたがって学校の根本的改革を望むのであれば、異教徒の著作は追放するか、あるいは少くとも従来よりは慎重に扱わなくてはならないこと。第二十六章、学校の規律について。第二十七章、年令と発育との段階にしたがって構築された・学校の四階程について。第二十八章、母親学校の原型。第二十九章、母国学校の原型。第三十章、ラテン語学校の見取図。第三十一章、大学について。第三十二章、ごく精密な・学校の全般的秩序について。第三十三章、この・普遍的な教授方法の実施にとりかかるに必要な諸条件について。

もとよりここで体系、組織的であるとはいっても、主著が近代以降のそれと、同じであるなどと、いわうとしているわけではない。近代以降の学問は、その体系において、屢々、「理性」の建築術と理解されていた例えのように、理性こそ組織、体系化の中心に位置していた。これに対し Comenius の場合は、近代の理性の地位に代わって、「神」が先験的に、絶対の王権を独占していた。これをまた「神」のみが一切であり、そこには人間理性の批判の入り込む余地は、全くなかったとみても、その意味は変わらない。そのことは例えば、「大教授学」(稲富栄次郎訳)における、つぎの引用にてらしてもわかる。

コメニウスの主著「大教授学」(Didactica Magna) の教育史上における意義と価値とについては、今さら贅言を要しないところである。教育史家チーグラールは、本書を以て教育史上最初の体系的な著作と解しているが、もしもある統一原理から、首尾一貫した演繹的な論述を以て、体系的と解するならば、本著は正しく体系的という言葉に、最も相応しいものといわねばならない。これはその内容

を一瞥したものの等しく看取するところであって、我々はここにも自から「統一への努力が自分の生涯の中心点であった」と述べているコメニウスの真面目を見のがす訳にはいかないのである。

しかしながらコメニウスの「大教授学」が体系的であるといっても、それはカントの批判哲学の関門をくぐった後の近代哲学が、体系的であるというのとは、大いにその趣を異にする。カント及びその学派においては、学問の建設は、いわゆる「純粋理性の建築術」であって、科学とはすべて最高の理性的原理から首尾一貫して演繹せられた整然たる組織をいうのである。しかしコメニウスにおいては、その最高統一原理は、理性的原理というよりも、卒直にただ神であり、神のみが、一切の支配者であった。ゆえに「聖書」の言葉は、常に絶対無上の権威を持ち、人間の教育というも要するに神の言葉を学び、神の道を遵守して、神の許において未来における永遠の浄福を享受する為めの準備を整えること以外の何ものでもなかったのである。

つぎに主著の第二の意義は、主著全章の脈流をなす、人間窮極の目的意識、いかえれば結局、教育最高の至上目的、およびそれに至るまでの現世の到達目的が、きわめて鮮明に、明定されていたという点に見出せる。その概要について要約すれば、以下のようになる。

(1)Comenius は、まず主著第一章に、かれのあらゆる諸思想の深淵ともいうべき、かれ固有のキリスト教的人間観念について、「人間は、被造物のうち最高の、最も完璧な・最も卓越したものであること。」と明定する。その核心はいいかえれば、第一に、人間は神の似姿として、「創造の業の預点」(absolutus colophon), 「感嘆すべき集約」(mirabilis Epitome), 「神の代理人」(Vicarius Dcus), 「栄光の冠」(corona gloriac neae) として創造されたものであること、第二は、そのような人間が、人間最高の至上目的を追求するのは、きわめて当然のことにすぎないということにある。(2)ついでかれは、以上の人間観念を基層に、人間窮極の目的、結局、教育最高至上の目的を、主著第二章に、「人間の窮極の目的(finis ultimus) は、現世のそとに (extra hanc Vitam) ある。」としたうえ、その目的は「完全性と幸福との頂点である神と結び合い、神の力によって欠けることのない栄光と幸福とを永遠に手に入れることである。」とみなす。(3)かれは上出このような脈絡のなかで、それ(来世)に至るまでの現世の意義(目的)について、ついで主著第三章に、「現世の生命は、永遠の生命への準備にほかならないこと。」と規定し、現世の意義を上掲本章題のように確定する。これは第二章、人間窮極の目的(教育最高の至上目的)を、仮りに上位終局の目的とみなせば、それに対する下位従属目的、あるいは過程現実目的ということになる。(4)かくして

かれは、さらに主著第四章に、「永遠の準備には、三つの段階があること。自分自身とともにあらゆるもの (omnia) を知り (Nosse) 支配し (Regere) 正しく神に向ける (ad Deum Dirigere) ことがそれである。」と述べ、現世の目的をつぎのように具体的に提示する。その第一は、「理性をそなえた被造物」(Creatura Rationalis)、第二は、「被造物の支配者である被造物」(Creatura creaturarum Domina)、第三は、「自分の創造主の似姿でありよろこびである被造物」(Creatura Creatoris sui Imago, et dellclum) となること、結局、これをまた第一に「学識」(eduditio) を身につけ、第二に「徳性」(Virtus) を養い、第三に、「敬神」(Pietas) の心を深め育てるといふこととみても、その意味は同じことになる。

また主著の第三の意義は、上掲主著の教育目的について、実現具体化する可能性、つまり人間形成(教育)の基層を、ひとが生まれながらに本具する、人間自然の本性に位置づけていたこと、いいかえれば、かれの先駆的「内面自然観念」の発見という、この一点において見出せる。事実、かれはこのことについて、人間形成(陶冶)の根本、つまり「学識」と「徳性」と「敬神」への基礎 (Fundamenta sapientiae, virtuum, religionis) は、生得的に人間自然の本性のうちにあるとして、ゆえに教育は「人間に外部から、何物をも持ち込むべきではなく、むしろ人間自らの中に内具せるものを、ただそれらを開発し発展させ、すべてが本来あるところのものを啓き顕すことだけが、その任務である」(Nihil igitur homini ab extra inferri, sed quae in se ipso involuta habet, ea solum evolvi, explicori, et quid unum quodque sit commonstrari opus est.) とみなされる。いずれにしても、上出内面自然観念、つまり人間自発の自然本性の承認こそは、かれをして近世教育史上、その本流に先駆的地位を占有せしめた、主要功績であった事実には変わりはない。

このほか主著のもつ、第四の意義は、主著における学校組織の諸構想が、すでに今日的学校体系のアイデアの原型を、いち早く予示していたといふことの点にある。

たしかにかれは、このことについて、「人間形成の必要」(第六章)を述

べ、「教育の早期開始」(第七章)を提唱し、「男女平等」(第九章)と、「普遍的教育」(第十章)、「学校の創設」(第八章)や、「学校改革」(第十二章)に基づく、以下の年令と発育段階にしたがった、「学校の四階程」(第二十七章)を予示している。

(1)「母親学校の原型」(第二十八章) 母親の膝とも呼ばれ、六歳までの子供を対象にし、感覚の陶冶、遊城や童話、音楽や手工などによって、道徳的、宗教的、身体的発達を促す。(2)「母国語学校の原型」(第三十章) 七歳から十二歳までの子供を対象に、読書算などのほか、宗教、道徳、経済などを教える。あらゆる村落に設けることとする。(3)「ラテン語学校の見取図」(第三十章) 十三歳から十八歳までで、職工以上の生活を望むものを対象とする。ラテン語、ドイツ語などの他、修辞学、論理学なども教え、いっそう貫徹した教育を行なう。(4)「大学」(第三十一章) ここでは最高の教育がなされ、未来の教師や学者が養成される。これによって未来を荷う、教師や学者、聖職者に欠けることのないようにする。

さらに主著の第五の意義は、主著、「大教授学」(「*Didactica Magna*」)における主題、革新的教授技法の斬新性のうちに求められる。

(二)影響 主著のまた第六の意義は、主著が後世におよぼした、影響力の大きさのなかに見出せる。事実、主著の諸原理は、知らず知らずのうちに、数多くの人びとの間に浸透し、やがて始まる近代教育への基層を培養した。その諸例をみれば、主著は *Francke* や *Rousseau* をはじめ、*Basedow* や、*Pestalozzi*、あるいは *Fröbel* の諸原理に影響をもった。以上このことは、*Graves* の著書、「教育史」(「*A History of Education*」)によってみれば、以下述べるようになる。

コメニウスにおける原理は、無意識のうちに、他の人々によって採用され、そして近代教育の基礎となった。人を生活に適應させようとする教育課程を暗示することによって、コメニウスはフランケを予示した。ルソーに先立ってコメニウスは学校組織に児童を適應させるのではなくて、児童に学校組織を適應させねばならないということを熟知していた。バゼドーはその百科全書的内容と、自然的方法をば、専ら『世界図絵』を範として構成した。ペスタロッチは、この老司教

の著作のうちに現われた一般教育，児童愛，自然研究をば再興したのだ。ヘルバルトが品性と観察とに重点をおいたのは，コメニウスに反響したのであるらしい。またフレーベルによって提示された幼稚園や自己活動や遊戯やは，すでにこのボヘミア人によって輪郭を描かれていたのだった。それでこそ，十九世紀の半ばにおいて，ドイツの研究者たちによって再びコメニウスの著作が日の光を見るに至ったに際して，十七世紀のこの老实学主義者こそは科学的精神をもって教育を取扱い，また教育問題を真に学校内に實際化しとげた第一人者であったということが発見されたのであった。彼の仕事は明らかに，きわめて明白な理想ときわめて広い叡知とをそなえていた。今日彼を批評することは容易であるが，しかし歴史の光の中で見れば，コメニウスこそはおそらく近代教育発展の途上における最も重要な個人であろう。

## (2) 主著に対する批判

(一)批判 Comenius の主著「大教授学」(「Didactica Magna」)は，上述みてきたように，教育史上，はかり知れない意義と価値をもち，今日なお不動の地位を確保している。しかしそれにもかかわらず，他方主著に対する，少なからざる批判のあることも，また確かである。

例えば第一に，主著が上述どれほどすぐれた，体系的著作であるとしても，すでに指摘したように，近代以降のそれと，著しく趣きを異にしていることで，今日的批判は避けられない。

また主著の第二の意義，主著における人間窮極の目的，結局，かれのみならず，教育最高の至上目的にしても，キリスト教的かれの「来世」思想を基層にしているという点で，これを荒唐とし，無稽とする批判にも，著しく十二分な根拠がある。これを「コメニウス」(梅根語)によってみれば，以下引用の趣旨になる。

(1)来世主義 コメニウスの「大教授学」はまず人間論あるいは人生論からはじまる。最初の三章のみだしをあげてみると次のようである。第一章 人間は神の造りたもうたもののうちで，最後のもので，最も完全なもの，最も優れたものである。第二章 人間の究極の目的は現世の彼岸にある。第三章 現世の生活は永生への準備に外ならない。このみだしの文句だけでわれわれはコメニウスの教育学

が全くキリスト教的—ボヘミア同胞教团的な信仰の上に立っていることを知ることが出来る。彼はこのようなキリスト教のいわばオーソドックスとなっている信条を根拠づけようとしているいろいろの説明を行っているが、それらは今日の眼から見ると全く荒唐無稽というべきほどのものである。それはあたかも無知蒙昧な善男善女に来世の存在を説き聞かせる説教師のような論法でしかない。だがとにかくコメニウス自身が深く来世の存在を信じ、現世がそのための準備に外ならないことを信じ、それを彼の人生苦をたえ忍ぶよりどころとしていたことは明らかである。そして教育は彼にあってはこのような来世への準備作業としてまず観念されるのである。(2)三大目標 「大教授学」は以上三章における人生論をうけて次の第四・六章で、この永生への準備としての地上生活を、全き準備の生活たらしめるための努力の内容(三大努力点)そしてその努力は教育の力をまつことなくしては実を結ばないことが説かれる。まず準備としての現世生活が目指すべき三つの努力目標、達成目標——それは来世における神との合一という究極目標に対して、「それに従属する目標」*finis subordinati* とよばれる。(四章一節)——として、(一)理性的存在となること (二)すべての被造物の主人となること (三)創造主(神)の似すがたであり、その歓びであるような存在になることの三つがあげられる。(3)相互関係 この知と徳と敬との三者はそれではどんな関係にあるのか。この三つがバラバラのものであってはならないということはコメニウスの力説してやまないところである。……このように言われてはいるが、しかし知がどうして徳と敬虔に移行し、あるいは徳と敬虔を準備するかという教育哲学上の基本的な問題については彼は殆ど触れるところがない。そこには後のヘルバルトやその学派におけるような教育的教授の理論のごときものを期待することはできない。ただコメニウスは知識を限りなく重視し、十七世紀に至ってヨーロッパ世界に勃然として起りつつあった新しい自然科学的知識の重要性を大いにみとめると共に、そのような知識が徳や敬虔と無関係に、あるいはそれを妨げるとき作用を伴って横行する傾向を是正し、この知識を徳と信仰とに従属させ、その奉仕者たらしめようと欲したのである。

さらに第三に、教育(陶冶)の基礎を、人間の内在的可能性(自然本性)に見出した点は、先駆的であるにしても、前出同書における、つぎのような指摘も見逃せない。

(1)自然的基礎 三つの人生目標を完全に達成するように人間を助け導くことが教育の仕事であるが、その達成が可能であるためには教育の力だけでは駄目であって、教育以前の所与としてまず先天的な、内在的な可能性がなければならない。

「大教授学」の第五章はこのような知と徳と敬虔への先天的・自然的基礎がすべての人間に本具のものであることを論証しようとする。まず知的な自然性について。彼はいろいろの論拠をあげて人間に求知的傾向が内在していることを説明する。まず第一には、人間は神の似姿として作られたものであり、似姿というものは原型に類似したものである。ところで原型たる神のもろもろの性能のうちで「万知」(omniscientia)であることはその主要な性能の一つである、だから神の似姿である人間は、「生得的・先天的に万物の知識を獲得する可能性を持っている」(五章四節)というドグマ的な論証が持ち出される。同様のことは徳性と宗教心の内在についての説明についても言える。概して「大教授学」のこのあたりまでの論述は甚だ粗雑でコメニウスの思想の浅さを暴露している感が深い。だがとにかく彼は三つの人生目標—従って教育目標は、人間の自然性のうちにその可能性、あるいは傾向性の基礎を持つものであることをのべて、次章以下の教育論の出発点とする。(2)教育の必要 「大教授学」の第六章では前章をうけて、先天的傾向だけでは人間ののぞましい成長は達せられないことを説いて、前述の三つの目標に向っての教育作用の必要が説かれる。この章の叙述もまた平凡でただ、先天的に具わる知と徳と信仰の種だけでは、具体的・現実的な知や徳や信仰は形成されないこと、そのためには教育によって具体的な知識内容、行動にまで訓練されなければならないことが、石は石のままでは家にならぬ、加工を必要とするとか、植物は栽培されなければならないとか、動物は馴養されなければならないとか、説明されているにすぎない。このようにコメニウスが、精神の内在性や教育の可能性を説くときの論証のしかたはこの本の他のすべての場合と同じように非常に粗雑で、ただ俗耳に入りやすいたとえや実例をたくみに使って分りやすく説明しているにすぎないが、このことはこの本がわざわざチェック語で、祖国の一般民衆に読んでもらうことをねらいとして書かれたものであることを頭において評価するべきであろう。

第四に、このほか主著が、上述近代以降における、今日的学校の原型を、予示していたことは確かだとしても、なお前出同書の以下の指摘もうなづける。

(1)公教育 学校教育の必要論もまたこじつけ的なたとえばかりで頼りない。学校教育の価値を説くのに、専門教師による教育の専門化が能率と効果の上で必須であること、集団教育が学友の示範による動機づけによって個人の学習を促進する効能があることだけが指摘されて、集団教育のもつ社会的・道徳的な教育の場としての特質に及んでいない点では、例えばイギリスのマルカスターがその著



“Positions”の中で論じた学校論には遥かに及ばない。(2)教職 ただ彼が教育という仕事が、専門の職業として、専門的な教養を持った職能人としての教師によって、産業の諸部門や裁判や宗教と同じように、独立した專業化さるべきであることを強調している点は、彼の生涯の事業の一つが、この専門職業としての教育職の技術の確立にあったことと考え合せて、重要な論点であるということができらるであろう。彼の時代の学校がこのような専門職としての教師によってではなく、僅かに文字を知っているだけにすぎない無職者や下級僧職者の内職的な職業として営まれていたことを考える時、彼のこの主張は重要な革新意見であった。学校を専門職としての教師によって、技術的に經營される、専門的な、従って組織的な教育機関にまで高めようというのが、彼の教育改革運動の主要なねらいであったのである。

(二)視座 以上 Comenius の主著、「大教授学」(「Didactica Magna」)に対する、意義と批判について、あらためて照合して気づくことは、主著において、かれが求めた、かれの跡を求めるのではなく、それ以上第一に、かれが求めないではやまれなかった、かれの意図と、第二に、その意識の深淵の底を、覗き見ることこそ、必須であるということである。

上出これらのことを念頭に、上述の視座から主著、「大教授学」(「Didactica Magna」)をみた場合、その著作意図を、最も単的に表出しているのは、以下に示す主著冒頭の主題に付けられた「副題」と、その趣意を詳らかに論述した、「読者へのあいさつ」(p. 20-27)に、併わせて、すべての上席者、つまり国政の「指導者」、教会の「牧師」、学校の「教師」、そして子供の「両親」に当てた「献呈状」(p. 28-45)、さらには「教授技術の重要性」(p. 45-48)の各項ということになる。

あらゆる人にあらゆる事柄を教授する・普遍的な技法を 提示する 大教授学。別名 いかなるキリスト教王国のものであれ 其の集落 すなわち都市および村落のすべてにわたり、男女両性の全青少年が、ひとりも無視されることなく、学問を教えられ 徳行を磨かれ、敬神の心を養われ、かくして青年期までの年月の間に、現世と来世との生命に属する・あらゆる事柄を 僅かな労力で 愉快に着実に 教わることのできる学校を 創設する・的確な・熟考された方法。ここで提示されるものすべての基礎は 事物の自然そのものから発掘され、真理は

工作技術の相似例によって論証され、順序は 年 月 日 時間に配分され、最後に、それらを成就する・平易で・的確な道が 示される。

私たちの教授学の アルファとオメガは、教える者にとっては 教える労苦がいよいよ少くなり、しかし 学ぶ者にとっては 学びとるところがいよいよ多くなる方法、学校に 鞭の音 学習へのいや気 甲斐ない苦勞がいよいよ少くなり、しかし、静寂とよろこびと着実な成果とがいよいよ多くなる方法、キリスト教国家に 闇と混乱と分裂とがいよいよ少くなり、光と秩序と平和と平安とがいよいよ多くなる方法を、探索し発明することではなくてはなりません。詩編 第67編 第一、第二句。 神の われらに憐みを垂れたまわんことを。われらに慈みを垂れたまわんことを。われらに慈悲を注ぎたまわんことを。われらの上に その顔を照らしわれらに憐みを垂れたまわんことを。われら、地上にて なんじの道をさとり、すべての国民の間にて なんじの救いをさとらんがために。

### (3) 教育による人類の救済

(一)人類の破滅 前述の視点から、かれの主著、「大教授学」(「Didactica Magna」)を見て言い得る、かれの教育努力の帰結は、結局、いかにして人類(人間)を「破滅」から救うか、そのための青少年の教育を、どうなすべきかの一語につぎ。かれはそのことを解き明すに当って、まず旧約聖書の教訓に溯り、「人類の破滅」の経緯と、それに対する「神」と「賢者」の嘆きから始めている。その要点を、主著によって示せば、以下のようになる。

神は まず初めに 地の塵から人間(Homo)を創造し、東方に設けておいた・よろこびの楽園(Paradisus voluptatis)に これをおきました。それは、人間にこの楽園を守らせ耕させるため(創世記 第二章 第十五句)であるばかりでなく、人間そのものが 神にとってよろこびの庭園(hortus deliciarum)となるためでもあったのです。(p. 28-1)

申すまでもなく楽園が 世界でいちばん気持のよい場所であったのと同じように、人間は、被造物の中でいちばん精妙なもの(creaturarum delicatissima)でありました。楽園は 太陽の現われる方角にしたがい、人間は 時間の始まりから永遠の日から現われている神の像にしたがって、造られてありました。見る目に美しくあじわうにこころよい果実の木は、ほかの場所では広く地上に散らばっておりますのに、この楽園には それが残らず育てられておりました。人間の中

には 世界の・すべての素材 (materia) と あらゆる段階にわたる形式 (forma) と諸形式とが いわば一かたまりにあつめられて、神の知恵の業のすべて (totum divinae Sapientiae artificium) を表わしておりました。楽園には 善と悪との知識 (scientia) の木がありました。人間にはどこにある・どのような善も悪もすべて見わける精神 (Mens) とそれを選びわける意志 (Voluntas) とがあるのです。楽園には 生命の木が、人間には 不死の木 (Arbor immortalitatis) そのもの、申すまでもなく 神の知恵 (Sapientia Dei) が ありました。神の知恵は 人間の中に 永遠の樹根をおろしていたのです (シラク書 第一章 第十四句)。(p. 29-2)

以上このように、「神」の創造の喜びであった人間は、人間すべて初めにおかれた所にとどまっている限り、人間にとっては、まことに喜びの「楽園」であったのに、かれによれば、それにも拘わらず人間は、「肉」と「霊」の二つながらの「楽園」を、つぎのように失ってしまったとみている。いわゆる聖書における、「楽園」の喪失である。

ああ、私たちはなんと不幸なのでしょう。私たちはかつてそこにおりました。……肉のよろこびの楽園を 失ってしまいました。しかも同時に 私たち自身であった・霊のよろこびの楽園までも失ってしまったのです。私たちは地上の荒野に追放されました。いや 私たち自身が荒野にされました、まことにはずかしい・けがれた荒野にされてしまったのです。もちろんこれは、神がせつかく私たちの肉と霊とのためを思って 楽園の中に豊かに設けておいてくれましたものを、私たちがながしろにしていたからです。ですから、私たちがこれを二つとも奪われ 私たちの霊と肉とが苦しみにさらされることになりましたのも、当然のむくいなのです。(p. 29-4)

この結果人間は、すべて「破滅」と、「墮落」のただ中に置かれていることを、かれはまたつぎの諸例をあげて示している。

現在 私たちの中に また私たち人間の営みの中に、なにか一つでも 本来あるべき場所にあるもの あるべき姿をとっているものが あるのでしょうか。どこにも 一つもありません。なにもかも さかだちし 乱れ切って、崩れ去り 滅び去って行くのです。私たちは 認識の能力 (Intelligentia) を使って 天使に肩をならべるものにならなくてはいけなかったのです。ところが今はほとんど

の人の場合にも、途方もない愚かさが この認識能力にとって代り、その結果人間として必ず知っていなくてはならないものをなおざりにしている点では 獣と同じなのです。私たちは 思慮 (Prudentia) を働かせて 永遠な創造目的の永遠性にそなえなくてははいけなかったのです。ところが今は これに代って永遠性の忘却ばかりでなく 人間が死ぬことさえ全く忘れ去られ、ほとんどすべての人が 地上のもの うつろい去るもの いや 眼前に迫る死にさえも 自分をゆだねているのです。私たちは 神から授けられた知恵 (Sapientia) を使って いちばん高い善のうちでもさらにいちばん高い善を見きわめて これを尊び またこの善を限りなくあまくあじわうことを 許されていたのでした。ところが今は その知恵に代って、その中に私たちが生き動き在るところの神にたいして この上もなくいまわしいそむきが 見られます。神の・この上もなく神聖な力にたいして実に愚劣な挑戦が 行なわれています。人間どうしの愛情 (Amor) とまごころ (candor) とには 憎み合い 敵意戦争 殺し合いが いれ代っています。正義 (Iustitia) には 不正 不法 圧制 盗み 強奪が いれ代っています。純潔 (Castitas) には 心の思いと言葉と行ないとの不潔とよごれとが いれ代っています。わだかまりのない心 (simplicitas) と誠実 (veracitas) とには 嘘 偽り 人をおとしいれる畏が いれ代っています。謙虚 (Humilitas) には お互いに相手を見下し合う・ひややかな目と思いあがりとが いれ代っているのです。(p. 33-11)

(二)「神」の嘆き 上出なおこのことに対する、「神」と「賢者」との嘆きについては、かれは聖書と賢者の例を引いて、つぎのように述べている。

聖書をみたしているのは このような・嘆きの声です。一度でも目を人間の営みに向けてみれば、いや 教会の現状でさえ同じことなのですが、どの人の目もみたすのは あらゆる種類の混乱です。人間のなかでいちばん賢かったソロモンでさえ、自分の・心の思い 言葉 行ないも含めて 天日のもとに生ずる・すべての事柄を綿密に吟味した時、涙を流し始めたのです。どこにも空 (vanitas) と無 (ataxia) 以外のなにものもない。人間の過ちは もはや正すことができない、欠陥は もはや数えあげることができない (伝道の書 第一章 第十五句)。それゆえ まことに知恵そのものが 霊の憂いとなり 怒りと苦しみとを増す (同第十八句)。(p. 32-9)

かれはさらにこれに併わせて、「賢者」だけでなく、これらのことについて、世の中一般のひとが、誰でもなぜ気づき、「心を痛めないのか」と、

その訴えについて、以下のように言っている。

申すまでもなく、自分の病気を知らない人は なおすことを考えません。苦痛を感じない人は、うめくことはありません。危険に気づかない者は、たとえ深淵や断崖に近づいても、おびえることはありません。これと同じように、いま人類と教会とを食いつくしている混迷に目を注がない人が悩み苦しまないのも 別にあやしむに足りないのです。けれども、自分も他人も数え切れないよごれにまみれていることを 一たん目にした人がいたとします。自分の傷やできものも他人のそれもますます化膿してきたことがまぎれもなく、そこから出てくる悪臭が鼻をつくようになったとします。自分も他人も実に危険な地割れや穴に囲まれ、じょうずに仕掛けられた罠の間をうろついていることが わかったとします。いやそれどころか、走っているところが 底知れない断崖のふちで、ひとりまたひとりと墜落して行く者の姿が 目にはいったとします。いったい このような人がおそろしさにふるえずにいられるものでしょうか。驚きのあまり 立ちすくまずにいられるものでしょうか。苦痛のあまり 悶絶しないでいられるものでしょうか。((p. 32-10)

(三)教育努力 Comenius は、上述このように、「楽園」の喪失と、人間の荒廃を歎き、その回復と救済のいちばん有効な手立ては、青少年に対する教育努力以外にないと、以下後掲のように論定する。これによってみれば、かれが青少年の教育努力を、重くみているのは、以上このような、かれのキリスト教的人間観念が、その基層となっていることに、第一に注意しておく必要がある。そのことは事実、後に示す聖書の諸句に、照合してみればわかる。以上これらのことに顧みて、いずれにしても確かに言い得ることは、かれが人間(人類)の救済、墮落からの人間回復に、青少年に対する教育努力に、はかり知れない、期待を寄せていたという事実である。

ところで、神の聖書が教えておられますのはなによりもまず、天の下 人類の破滅 (*humanae corruptelae*) を救うには 青少年を正しく教育する (*Iuventutis recta institutio*) より有効な道はほかにはない、ということであります。申すまでもなくソロモンは 人類の過ちの迷宮を残らず遍歴し、その過ちはもはや正すことができない その欠陥はもはや数えあげることができない、と嘆いてついにひるがえって若い人々 (*Adolescennia*) に向かい、なんじの・若き日に なん

じの造り主をおもい 神をおそれ その戒めを守れ、なぜなら これが すべての人間の本分であるから、と願っております（伝道の書 第十二章 第十三句）。また ほかのところでは、子を 神の道にしたがって教えよ、されば 子は 年老いた時にも 神の道を離れないであろう、と申しております（箴言 第二十二章 第六句）。ダビデが、子らよきたれ われにきけ、われは、主をおそれることを なんじらに教えるであろう、と申しておりますのも（詩篇 第三十四編 第十一句）、同じことなのです。天にあるダビデ まことのソロモン すなわち 神の・永遠の子 キリスト、私たちが造りかえるために天からつかわされましたキリストは、自ら この・同じ道を いわば指さすように示しました。キリストは申しております、幼な子のわれのもとにくるのを許せ。これをとどめてはならぬ。なぜなら、天の王国はこのような者のものであるから（マルコによる福音書 第十章 第十四句）。私たちおとなには しかし、なんじらは 心をあらためて幼な子のようになるのでなければ 天の王国にはいることはできないであろう、と申しているのです（マタイによる福音書 第十八章 第三句）。（p. 35-15）

上出指摘の聖書の諸句を、以下に示せば、つぎのようになる。

(1)「あなたの・若い日に あなたの造り主を覚えよ」、「神を恐れ その命令を守れ。これは すべての人の本分である」（伝道の書 第十二章）(2)「子を その行くべき道にしたがって教えよ、そうすれば 年老いても それを離れることがない」（箴言 第二十二章）(3)「子らよ、来て わたしに聞け、わたしは、主の恐るべきことを あなたがたに教えよう」（詩編 第三十四編）(4)それを見てイエスは憤り、彼らにいわれた、「幼な子を わたしの所にくるままにしておきなさい。止めてはならない。神の国はこのような者の国である」（マルコ福音書 第十章）(5)「よく聞きなさい。心をいれかえて幼な子のようにならなければ、天国にはいることはできないであろう」（マタイ福音書 第十八章）

このようにして Comenius は、「子供」こそ本当の改革における、「まと」であるとみたばかりではなく、その「手本」であるとみなし、すべてのひとが、この言葉に耳を傾けてほしいこと、心して目を注いでほしいと訴える。また子供たちに対しても、子供こそ「王国」の相続人であること、いとし子供たちは、この天与の特権を自覚し、決してないがしろにすべきではないと、以下の趣旨のように言っている。これをみても、かれが人類（人間）の救済における、青少年（子供）の位置を、いかに重く認識してい

たか的一端がわかる。

ああ、なんという意味深い言葉でしょう。すべての人が この言葉に耳を傾けて下さい。万人の教師がであり主である神がここで説きあかしておりますことがどのようなことであるのか、心して目を注いで下さい。神は、どんなに力をこめて話していることでしょう。ただ子どもたちだけが (soli parvuli) 神の王国にふさわしい、と。いや ただ子どもたちだけが その王国の相続人であるのだ、と。神は、子どものようになった者だけに この相続権にあずかることを 認めているのです。おお、いとしい子どもたちよ、どうか この・天与の特権があなた方のものであることを、さとしてほしいのです。ごらんなさい、私たち人類に残された誉れ つまり天の祖国への権利はすべて あなた方のものです。キリストは あなた方のものです。霊の聖化は あなた方のものです。神の恩寵は あなた方のものです。未来の時代を相続する権利は あなた方のものです。心をあらためてあなた方のようになる者がいなければ、これらは皆 あなた方のものです、誰よりもまず また間違いなく あなた方を目指しています、いや ただあなた方だけを目指しているのです。ごらんなさい、私たちおとな (adulti) は自分たちだけが人間であって あなた方は猿である、と考えております。自分たちだけが賢く あなた方は馬鹿だ、と考えております。私たちだけが口をきけてあなた方は口をきけない、と考えております。その私たちが 実はもうあなた方の学校に送り込まれています。あなた方は 私たちの教師になっています。あなた方の行ないが 私たちの行ないの原型、手本となっているのです。(p. 36-15)

かれはまた「神」が何故これほどまでに、子供たちを重んじ、大切にす  
るのかの理由については、それは子供たちこそは、かれによれば、第一に、  
子供の「魂」は、大人よりもわだかまりがないこと、第二に、子供は「神」  
の心からの憐みの施しを、受け入れやすいこと、そしてかれは、結局、こ  
の理由の故にこそ、子供たちが、まだ因習にわざわいされないうちに、  
「神」の王国の相続人として、教育を施さるべきであるとしている。つぎ  
の引用をみれば、よりかれの趣旨がわかる。

神は なぜ、子どもたちをこうまでも尊びたたえるのでしょうか。この点をよく考えてみようとする人には 次ぎの理由以上に有力なものは 見いだせないと思うのです。それはつまり、どの点から言っても 子どもの魂は おとなよりわだかまりがないものでありますし、神があわれみの心から人間の現状に涙して施

してくれる治療を受けやすい、ということなのです。その理由はこうです。アダムの堕落に始まる破滅が 私たち人類の全体を貫いているにしましても、第二のアダム・キリストは あらためて人類を その身に、つまり生命の木に接木してくれたのです。この・生命の木から引き剥がされるのは、自分の不信仰によって自分自身を引き剥がす者以外 ひとりもないのです（マルコによる福音書 第十六章 第十六句）。ところが このような不信仰は 子どもたちの中には まだ見られません。ですから、まだ罪と不信仰とに身をけがされていない子どもたちは、自分がすでに受けている・神の恩寵を手離さず 俗世にけがされないように身を守ることができさえすれば、神の王国の相続人とよばれることになるのです。間違った因習にわざわざされないうちは子どもたちこそ おとなよりも教えやすい、と申しますのも、これによるのです。（p. 37-17）

かれはこのように青少年、とりわけ子供年代の教育努力の大切さについて述べ、そのことはひるがえって、大人に対する教育の困難さに当てはめてみれば、よりそのことが理解されるとしている。つまり大人はすでにこれまで、誤った教育によって、誤った習慣を身につけてしまっている。かれはこれを第二の習性と呼び、大人になってからでは、つぎのように、正しい教育は不可能であるとしている。

キリストが 私たちおとなに向かって、心をあらためて いわば幼な子になれ、いいかえますと、ゆがんだ教育によって身につけた悪、俗世の・ゆがんだ先例によって学んだ悪を 振り落として 単純と柔和と謙虚と純潔と従順などの心にみちた・子どもの頃にかえれ、と命じておりますのも この理由によるのです。けれども、申すまでもなく 習慣を振り捨てる (*adsuetis desuescere*) よりも難しいことは 一つも見あたりません。なぜなら、習性 (*consuetudo*) は 第二の天性であるからです。天性は 力の限り追い払っても しかし いつも舞いもどってくるのです。それゆえ ここから、間違った教育を受けた人間を、正しく引きもどすより難しいことは 一つもない、ということになります。申すまでもなく、若木の時に 上に高く育ったか 横に低くのびたか 梢が素直にひろがったか 曲りくねったか、それがそのまま成木の姿です。成木になってからでは もう変えることはできません。輪たが つまり曲げた・車輪の木材は そのままの形で固くなります。真直ぐにもどそうとすれば その前にたちまち砕けてしまいます。神もまた 同じことを、悪行が習い性となった人々について 申しております。エチオピア人がその皮膚を 豹がその斑点を 変えることができるものであ



れば、悪を行なうことを教えられたなんじらにも善を行なうことができるであろう（エレミア記 第十三章 第二十三句）。（p. 37-18）

#### （4）青少年期教育の必須

（一）現実 人類（人間）の救済は、上述みてきたように、大人に期待することは不可能である。したがって青少年への教育努力以外に、有効な方法はないとはいっても、現在では「悪」の混在が、また少なからず、青少年を滅ぼす方向に向かわせているのが現実である。このような今日の青少年の雛勢であってみれば、わが子に「善」の名に値いする何かについて、教えられる両親は、ほとんど見当らない。そればかりではなく、教師もまた無力に等しい。かれはこの今日の現状について、事実、「悪」の数は、「徳」の数より、はるかに多いと指摘し、さらにつぎのように述べている。

ところが、現在の私たちは 善が悪とまじりあいとけあった世に住んでいます。悪の数は 徳の数よりもはるかに多いのです。悪の実例が 青少年をぐんぐん引きずって行きます。ですから徳をつちかうことを教えて これを悪の解毒剤としようとしても、全く効果があがりません、あるいは僅かしかあがらないのです。（p. 41-26）

しかし、さまざまな徳をあれほど教えてもなお役に立たない理由は いったいどこにあるのでしょうか。わが子に 善の名に値いするものを教えることのできる両親が ほとんどいないということです。それは、両親自身が そのような善を学んだことがないためか、あるいは ほかの事柄に気をとられて学ぶことをおろそかにしているためです。（p. 41-27）

それはまた、青少年に善をうまく注ぎ込むことのできる教師が ほとんどいない、ということでもあります。かりにそのような教師が出てきましても、これは 誰か有力者につれて行かれてその一家だけの教育を命じられるにすぎません。折角の能力も 広く世の中のものにならないのです。（p. 41-28）

以上の現実を照らして、今日このため青少年（子供）たちは、どのようになっているかといえ、かれらはみな、「野放し」にされ、当然大人にしてもらわなければならない「世話」もされず、「野生の木」同然になっ

て、「悪」の道を急ぎ始めている。もともと子供たちが持っていた、「わだかまり」のない、子供の「魂」もなくなり、「神」の救いすらも、受け入れ難くなってきている。かれはそのことを、つぎの引用のように述べて、それはちょうど、「彼らはみな 迷い、みなひとしく腐れた。」「善を行なう者はない、ひとりもない。」(詩編 第十四編)に似ているとみている。

こうしたところから、青少年は野放しにされ 当然してもらわねばならない世話もされずに育ち 野生の木同然になってしまうのです。誰が 野生の木などに接木をしたり 水をやったり 枝を刈り込んだり 枝ぶりを直してやったりするでしょう。世の中が、つまり どの町も村も どの家庭も どの人間も皆、野育ちの習慣や習性におおわれているのですが これはそうした理由によるのです。どの人間の肉も霊も 隅々まで文字通りの混乱でいっぱいです。もし今ジオゲネス ソクラテス セネカ ソロモンが生き返って 私たちのところを訪れるとしても、目にするものは 当時の・地上の姿とかわるものではありません。もし神が天から私たちに話しかけるとしても、その言葉は 昔神が語ったものと違うとは思われないのです。すべての者は 腐っている、その求めるところすべてにわたって いたうべきことをしている。(p. 41-29)

(二)助言の切要 Comenius は、青少年の現状を、以上このように認識して、前述、大人はもとより、子供(青少年)たちまでが、破滅の道へと、突き進んでいるとすれば、いまこそ人びとは、子供(人類)の救いのために、「万人」が「工夫」をしなければならないと、後掲引用のように訴える。かれはここで繰り返えし、「どこの国」の「どなた」であるかを問わず、どんな「方法」でも、育って行く「青少年」(子供)のために、「助言」の切要を提案する。これをみても、かれの「教授学」(Didactica)の提唱が、かれの人類の救済にかける、やまれない意識に由来していた所以もわかる。

ですから、どこの国のどなたでもかまいません、どんな方法によれば 育って行く青少年にいちばん効果的な助言を与えることができるのか、これについて工夫のできる方、ないしは工天を考えつける方、あるいは ため息をつき うめき声をあげ すすり泣き 涙を流して神から工夫を受けとることのできる方は、どうか口をつぐまずに 進んで助言を与え 考えを凝らし 口をひらいて話してい

ただきたいのです。神は申しております、盲の者を道に迷わせる者は のろわれてあれ、と（申命記 第二十七章 第十八句）。しかし盲の者を迷った道から引きもどすすべを知りながら 引きもどそうとしない者も のろわれてあれ、です。小さい者ひとりでさえ迷わせる者は わざわいなるかな、とキリストは申しております（マタイによる福音書 第十八章 第六、第七句）。迷わしを遠ざけるすべを知りながら 遠ざけようとししない者も わざわいなるかな、です。ろ馬あるいは牛が森あるいは野に迷い、あるいは重荷を負ってあえぐ時、神は なんじがこれを見捨てることを よろこばず、これを助けることをよろこぶ。たとえなんじが その持主を知らず、たとえその持主がなんじの敵であることを知るにしても（出エジプト記 第二十三章 第四句、申命記 第二十二章 第一句）。まして、感情のない家畜ではなく 理性をもった被造物（*Creatura rationalis*）である人間が、それも ひとりふたりのことではなく 全世界（*Mundus totus*）が道に迷っているのを目にしたが、ひややかにこのかたわらを通りすぎ 手をこまぬいているとしたら、はたしてこれが 神の心にかなるものと言えるでしょうか。かなうはずはありません、かなうはずがないのです。（p. 42-30）

（三）要請と提言 Comenius は、前出、大人はもとより、子供までが今日では、上述のように破滅と、墮落の方向に突き進んでいるとみなし、その救済のために、今日、「子供」こそ、ほんとうの「改革」のまどであると認識して、青少年（子供）の教育努力の必須を、あらゆる人びと、つまり具体的には、「人事」のすべての「上席者」、まず「国政の指導者」、教会の牧師、「学校の教師」、子供の「両親」と「保護者」各層に、以下のように要請と提言する。

第一、国政の指導者に対しては、一刻の猶予もなく、「正義」の剣をふるって、「混迷」を放逐してほしいとする。かれは以上の趣旨を、地上は「混迷」に満ちているとみて、以下のように訴えている。

神の業を行なうことを怠る者は のろわれてあれ、自らの剣をバビロンの血にふれさせない者は のろわれてあれ（エレミア記 第四十八章 第十句）。私たちは、現在の混乱 この・いとうべきバビロンを ひややかにみのがしながら、しかも罪を免がれたいと思っているのでしょうか。おお 剣を帯びておられます方は どなたも その剣を抜き放って下さい。さもなければ あなたは、おさめ

られた剣を離さぬ鞘がなんであるかを ご存知だということになります。エホバの祝福を受けられますように バビロンの放逐を急いで下さい。(p. 43-31)

為政者 (Magistratus) の方々よ 主の・いと高きしもべの方々よ、一刻の猶予もなくこの事業を急いで下さい。神があなた方の腰に帯びさせました剣 正義の剣をふるって 混迷を放逐して下さい。地上は この混迷にみちて、あなた方は 神の怒りをかっているのです。(p. 43-32)

第二に、教会の牧師に対しては、言論の剣を用いて、「悪」を根絶してほしいこと、人類のなかの「悪」に抵抗するため、子供に対しては、幼年早期に、「抵抗力」を養ってほしいこと、以上これらのことのために、学校を「秩序」あるものとし、以下人間の本当の「製作場」(Verae vivaque Hominum officinae) とすべき趣旨を、つぎのように述べている。

聖職者 (Praesules) の方々よ イエス・キリストの・忠実なしもべの方々よ、一刻の猶予もなくこの事業を急いで下さい。もろ刃の剣 言論の剣をふるって 悪を根絶して下さい。申すまでもなく、あなた方は、悪を抜き こわし 倒し 散らすために いなまさに善を建て 植えるために、立てられたのですから (エレミア記 第一章 第十句, 詩編 第百一編 第五句, ローマ人への手紙 第十三章 第四句 など)。けれども すでにおわかりのように、人類の中の悪に抵抗するには、人間の幼少期のうちに 抵抗の力を養うにまさるものはありません。若木を植えて滅びることのない永遠性をえるには、新しい若木を植えてこれを育てるにまさるものはありません。バビロンの代りにシオンをうち建てるには、生きた神の大理石つまり青少年を いち早くきり出し 切り 磨いて 天の建物に寸法をあわせるにまさるものはないのです。ですから、もし私たちが秩序のある・花開く教会 (Ecclesiae) と国政 (Politiae) と家政 (Oeconomiae) とを望むのでしたら、なによりもまず 学校を秩序あるものにし これに花開かせ、学校が本当の・生きた・人間の製作場 (verae vivaque Hominum officinae) となり 教会と国政と家政との苗床 (seminaria) となるように したいものです。このようにしてこそ初めて 私たちは目的をはたすことができるはずですし、またこれできなくてはいはたすことができないのです。(p. 43-33)

#### (5) 教授学の探究

(一) 教授技術の重要性 Comenius はここまできて、ところでこのように、「青少

年」を「注意」深く教育するとは、どういうことか、あらためて問いなおし、かれはその趣旨を、つぎのように言っている。第一は、まず青少年の「魂」を、俗世の破滅から守ること、第二は、青少年の心に宿っている、あの「徳」への「種子」(honestatis semina)の萌芽を、養い育てること、第三は、青少年の精神を、「神の認識」(cognitio Dei)と、「自分自身の認識」(cognitio sui ipsius)へと導き、第四に、そして、「事物の認識」(Cognitio rerum variarum)とで満たしうるよう、心を配ってやることであるとしている。そのことは、つぎのかれの趣旨につくされている。

ところでしかし、青少年を用意周到に教育すると申しますのは、まず、青少年の魂を俗世の破滅から守るように、心を配ることです。また、青少年の心に宿っている・あの徳の種子(honestatis semina)にうまく芽をひらかせるために、清らかな手で絶えず導き、手本を示してこれをさそい出すように、心を配ることです。そして最後に、青少年の精神を 神の認識(cognitio Dei)と 自分自身の認識(cognitio sui ipsius)と さまざまな事物の認識(cognitio Rerum variarum)とでみだし、こうして 神の光の中で光を見ること いろいろな光の父である神をなによりも愛し尊ぶことが 青少年の習性となるように、心を配ることなのです。(p. 39-22)

以上の趣旨は、主著第五章によって示す、あの三者、第一に、「学識」を身につけ、第二に、「徳性」を養い、第三に「敬神」の心を深め厚くすることと符合している。この三者は、Comeniusにおいては、「永遠の生命への準備」(第三章)に対する、現世の教育目的の三指標にされる。

いずれにしても、ここでより重要なことは、以上の目的を成就するにはどうすればよいか、その方法の吟味の切要ということになる。かれはこのことの趣旨を、「方法」を示し、「吟味」する必要があるとして、指摘している。その吟味における核心は、そのことによって、いうまでもなく、「両親」や「教師」、「子供」(生徒)や「学校」、「国家」や「教会」いずれもが、本来あるべき方向に、位置づけられるべきことにある。かれはそのことについて、「教授技術の重要性」の項において、以下のように具体

的に述べている。

その第一は、かれによれば、何よりも「両親」にとって、切要であるとされる。そのかれの趣旨をみれば、以下のようになる。

両親にとって大切です。今までの両親はおおかた、自分の子供に何を期待してよいのか、見当がつきませんでした。両親たちは教師を雇いました。これにおもねりました。贈物をしてきげんをとりました。教師をとりかえてもみました。しかし、なにがしかの成果をあげることもありましたが、多くのばあいはなんにもなりません。これにひきかえ、あくまでも過ちのない的確さに基づいて演繹された教育方法による場合には、神の力によって期待したとおりの効果が生じないではないのです。(p. 45-1)

第二に、そのことはまた、かれによれば、「教師」にとって、大切であるとされる。かれはその理由を、従来の教師はおおむね、「教授技術」については、皆目つぎのように、「無知」であったからとしている。

教師にとって大切です。教師はおおむね 教授技術について皆目無知でした。ですから、職責を充分にはたそうと思えば 疲れはて、苦勞して努めれば 力は尽きはてるのでした。あるいはまた 教授方法をとりかえて、ある時はこの、ある時はあのやり方で 成功させようとはかりましたが、しかし うんざりする程 時間 (tempus) と 労力 (labor) とを無駄にせずには済まなかったのです。(p. 45-2)

第三に、そのことは、かれによれば、「子供」(生徒)にとっても大切であるとみなされる。なぜなら有効な教授学の確立は、子供を「容易」に「嫌悪感」なしに、学習の頂上に導くことが出来るからである。第四に、それはさらに「学校」にとっても、きわめて重要になる。「教授学」の工夫は、学校に「活気」(in vigore conservari)を取り戻し、学校が文字通り、子供の遊びの「場所」(Lubi)、「よろこび」と「楽しみの家」(Domus deliciarum et illecebravum)に変える。かれは以上その趣旨を、以下引用のように説明している。

生徒にとって大切です。なぜなら、むづかしくもなく いや気がさすこともなく 教師に怒鳴られることもなく、いわば遊び楽しみながら (quasi per ludum et jocum) 知識の頂上に連れて行ってもらえるからです。(p. 45-3)

学校にとって大切です。教授方法を改善すれば、学校はいつも活気をたたえる (in vigore conservari) ようになるばかりでなく、また 限りなく拡大して行く (in infinitum rugeri) ことになるのです。なぜなら、学校は、子どもたちにとって 文字通り遊びの場所 (Ludi) となり よろこびと楽しみの家 (Domus deliciarum et illecebrarum) となるでしょうし、それにこの教授方法は、過ちのないものですから、どの生徒も、上級学校なり下級学校の教師になれますし、したがって 学校の指導者が不足するとか 学習が花開かないといったことは絶対になくなるからです。(p. 45-4)

第五に、そのことはまた、かれによれば、「国家」の場合にはいうまでもなく、第六に、同様「教会」にとっても、切要とみなされる。ここで国家にとって重要であるというのは、国家の土台は、若い人の「教育」に依存し、教会においては、このことによって、「学識」豊かな牧師に、事欠かなくなるからである。その趣意は、かれの以下の引用の趣旨につくされている。

国家にとって大切です。これは 前にも引用しましたように キケロが証言しているところです。(ストバエウスによりますと) これに一致するのが ピタゴラス派のジオゲネスの言葉です。国家全体の土台とは なにか。若い人の教育である。しかし 手入れのよくないぶどうの木に 良い実がなったためしは 一度もない。(p. 46-5)

教会にとって大切です。学校という土台がしっかりしさえすれば、教会に学識豊かな説教僧が不足するとか、また本当に学識の豊かな説教僧のもとに それにふさわしい聴衆が集まらない、というようなことは なくなるからです。(p. 46-6)

第七に、さらにそれは、かれによれば最後に、「天」にとっても、きわめて重要であるとされている。結局、上述これまで繰り返えし述べてきたように、かれの教育の目的は、他ならぬ人類(人間)の「魂」の救済にあり、そのための青少年(子供)の教育努力への着目以外の何ものでもなか

った。したがってかれの場合、「教授学」の確立とはいっても、決して単なる「技法」のための技法の工夫につきてはいなかった。「教授学」の確立と、それに基づく新学校の創出を通して、「あらゆる人びと」に、誰もが「無視」されることなく、「現世」と「来世」に属する、「生命」のすべてに関わる、あらゆる「事柄」を伝え、広めることにつくされていた。かれの以上そのことの趣旨は、つぎの引用をみればうなづける。

最後に人々の魂を念入りにしかもあらゆる面にわたってつちかうために 学校を改革する (reformari) ことは、天にとって大切なことです。申すまでもなく、神のらっぱの・高らかな響きにも目をさまさない人々が、これによって神の光の輝きに照らされ たやすく闇から解き放たれるのです。もとより、福音は あまねく伝道されてほしいのですし 世界のはてまでも伝道されて行くことを私たちは望んでおります。

ですからこれ程までに神聖な計画から 自分の考えと願いと力と援助とをひそかに遠ざけてしまうような人はひとりもいてほしくはありません。これを意志させた神は またこれを成就させるはずであります。これが 神のあわれみによって 一つの例外もなく成就するように 祈りをこめ望みをかけるのが、ふさわしいことです。なぜなら、人間の福祉と至高なる神の栄光との成否は ここにかかっているのだからです。(p. 46-7)

(二)従前の工夫 Comenius は、「教授学」の確立の切要を、「教授技術の重要性」として、上出このように訴えたあと、主著「大教授学」(「Didactica Magna」)序文、「読者に挨拶をおくる」冒頭に、「教授学」(「Didactica」)とは、「教授の技法」(docendi artificium)のことであるとしたうえ、以下従前の「教授技法」における、工夫の欠陥を指摘し、「教授学」(「Didactica Magna」)創案の必須を強調している。

つまりかれによれば、確かにこれまでも、幾人かのすぐれた人びとが、余りにも学校での「シジフォスの石」、いいかえれば「賽の河原の石積み」の無駄、徒労に心を痛め、数々の教授技法の工夫に骨を折っては来た。またこのほか数多くの人達が、例えば「言語」(Lingua)の教授の早道や、「知識」(Scientia)、あるいは「技術」(Ars)を手早く注ぎ込む近道を模索



してはきた。しかしこれらいずれの場合も、少なからず、その場かぎりで、  
いうならば「ア・ポステオリ」(a Posteriori) な方法でしかないものが、ほ  
とんどであった。そのことについて、かれの指摘をみれば、つぎのよう  
なる。

教授学 (DIDACTICA) とは、教授の技法 (docendi artificium) をいいます。  
最近 幾人かの・すぐれた人々が学校での・シジフォスの石に心を痛め、この技  
法の探究を始めました。しかし、その企てもまちまちであれば成果もまちまちで  
ありました。(p. 20-1)

ある人々は この言語 (Lingua) あるいはあの言語だけを たやすく教える  
早道を求めました。ほかの人は この知識 (Scientia) や技術 (Ars) あるいは  
あの知識や技術を 手早く注ぎ込む近道を探りました。別の人は また別のもの  
を求めました。ほとんどすべての人が 今までよりもたやすい教授実践の中から  
寄せ集めた・なにがしかの・皮相な観察に すがっていたのです。つまり この  
人々の方法は いうならば ア・ポステリオリ (a posteriori) なものでありま  
した。(p. 20-2)

上出ここで、幾人かの「すぐれた人々」というのは、かれによれば、  
Ratke や Lubben, Helwing や Ritler あるいは Bodin や Glaum, Vogel や  
Wolfstirn, および Andreae のことを指している。かれはこれらの人びと  
が、珠玉の諸著作を通して、単に「教会」や「国家」の病弊だけでなく、  
「学校」の病氣をも、瞭然となし得たとして、そのことをつぎのようにみ  
ている。

私が申しておりますのは ラトケ、ルービン、ヘルヴィーク、リッター、ボジ  
ン、グラウム、フォーゲル、ヴォルフシュチルン、およびまっさきに名前をあげ  
なくてはなりませんヨハン・ヴァレンチン・アンドレアエ (この人はその・  
珠玉の諸著作の中で、教会や国家の病氣ばかりでなく 学校の病氣も見事にあば  
き出し、いろいろな箇所での治療法を示しました)。あるいはそのほかにもま  
だ私が存じていない方がおられましたら その方々のことであります。しかし  
フランスもまた この石をころがし始めました。ジャン・セシル・フレールが 一  
六二九年にパリで 見事な教授学を(「高貴な知識 技術 言語 および即興演  
説の習得にいたる・新しく平易な道」という被題で) 公刊したのが それです。

(p. 23-10)

前述これら Comenius のみならず、幾人かの「すぐれた人々」のうち、とりわけ Ratke についていえば、かれは事実、第十七世紀初頭、同国教育改革運動の先駆者として、従前の教授方法とは異なる、効果的で、確実な教授技法の提唱をなした。その要点は、以下の13点に要約されるが、その諸原則は、多く Comenius の内に、取り入れられたとされている。

(1)教授の技法は、普遍的で・しかも徹底的な働きを持つものであって、青少年をひとりも除外することがなく、また どの青少年にも完全にもものを読む力・書く力を与えるものでなくてはならない。(2)ものを読む力・書く力 の教授は、まず聖書にある・神の言葉から始めなければならない。(3)一時には一つの言語ないし技術を教えるにとどめなければならない。(4)教授と学習とは、自然の順序にしたがわなければならない。すなわち、単純なもの・程度の低いものから 複雑なもの・程度の高いものへ、よく知っているものから まだ知らぬものへ 進まなくてはならない。(5)生徒には 先に規則を教えるてはならない。まして 暗記を強制してはならない。まず 事物そのもの 言語そのものを、定評のある作家の作品から学ばせ 理解させなくてはならない。(6)どの技術も 初めは簡単にのみ込ませ 次第に詳しく理解させ教えるのでなければならない。(7)すべての学科は 調和し一致しなければならない。どの言語も 同一の教授方法で教えるばかりでなく、どの技術もその間にくいちがいがあってはならない。(8)学習はすべて まず母国語で行ない、生徒が母国語を完全に習得してから 他の言語に進むのを許すのでなければならない。(9)学習はすべて 生徒の気持に逆って強制してはならない。学習上の理由で 生徒をなぐってはならない。(10)従来のように ラテン語 ギリシャ語だけでなく、高地ドイツ語および必要な・あらゆる言語 神学 法学 医学 文学もすべて教えねばならない。(11)学校は、教授する言語の区分によって それぞれ別の場所に設置しなければならない。(12)学校にはそれぞれ 校長 教師をおき、これらは 視学官に教育について報告しなくてはならない。(13)男子の生徒は 男子の教師が教授し、女子の生徒は すぐれた婦人教師が教授しなければならない。

いずれにしても、かれはこのように、機会あるごとに、多くの「すぐれた人々」からの刺激を受け、模索研究できることを、余人の想像し得ない、深い「喜び」であるとしている。また他方、「古い学校」の「潰滅」と、新し

い学校の「見取図」が、各国各方面で、時を同じくして出現しつつあることに、つぎの引用のように力強い「希望」を見出し、なお根本的な「方法」の確立が、見出されないことには、一抹の不安があるとしている。

私は 機会あるたびに これらの人々を研究することができましたが、そのさいに私は 申し上げても信じてはいただけないほどの・深い喜びをあじわいました。それは祖国の破滅と全ドイツの・悲惨きわまる状態とに痛む心の嘆きを おおかたいやしてくれるほどの喜びでありました。そうです、私は、至高な神の計らいは この明暗両者をいたずらに結びつけているのではなく、だからこそ 古い学校の潰滅と 新しい設計 (ideae novae) に基づく・新しい学校の見取図 (novarum Scholarum delineationes) とが 時を同じくして現われたのだ、という希望を抱き始めたのです。申すまでもなく、新しく建物を立てようとする者は 今までの・不便な建物 あるいは壊れた建物をとり除いて 敷地をならしておくのが、ふつうなのです。(p. 23-11)

つまり、この考えが 心おどる喜びをまじえた・力強い希望を 私の中に沸き立たせてくれました。けれども、これほどに重大な事柄が まだ十分に根本から明らかにされてはいないことを思うと、この希望もやがて次第にうすれていくように感じられたのです。(p. 24-12)

事実、新しい「教授学」の確立をめざす Comenius に、互いに交信し合って、心から援助を与えてくれた者は、「友情」のこもった返事を寄せ、「光明」を授けてくれた、Andreae を除いては他には誰もいなかった。この Andreae の励ましによって、Comenius が、結局、広く人びとの「福祉」(Publicus profectus) のために、「教授学」の確立を、「根本」(a fundamento) から、究めつくさずには、いられなくなった。その根本趣旨をみれば、以下つぎのようになる。これを見れば、人類(人間)の救済に賭ける、かれの意識の淵の深さが、あらためて覗きみられる。

そこで私は、いくつかの点についてぜひともさらに十分な教えを受け また私の方からも少なからず意見を申し述べたいと思って、あの人々のひとり ふたり三人へと手紙をおくりました。しかし これは無駄でした。なぜなら、多くの人は 自分の発明をひたかくしにかくし、あるいはまた あて名の人が見あたらず

返事をえられぬままに手紙が戻ってきたからです。(p. 24-13)

そのうちでただひとり、光り輝くヨハン・ヴァレンチン・アンドレアエだけが友情のこもった返事を寄せて、私に光明を授けてくれましたしいま一度やってみる気力をふるい起こさせてくれたのです。私の心はこれにいわば励まされて、今までよりも懸命にそれらの点に取り組み始めました。そしてついに 広く人々の福祉を (publicus profectus) 思う・激しい願いから この事柄を根本から (a fundamento) きわめ尽さずにはいられなくなったのでした。(p. 24-14)

#### (6) 教授学原理

(一)教授学の確立 Comenius は、これまで繰り返えし、みてきた経緯のなかで、結局、かれの辿り着いた結論は、人類(人間)の救済に伴う、青少年(子供)の教育努力における、独自にして、革新的「教授技術学」の確立、それ以外の何ものでもなかった。

事実、かれはそのことについて、従前これまで、他の人びとが試みた、「発明」や「考え」、「観察」や「勧告」などは、ひとまず傍におき、自ら「学習」(Discentia)の「使命」(causae)や「方法」(rationes)、「方式」(modi)や「目標」(metae)を、探り求めることにしたと宣明する。かくして Comenius は、以上の状況のなかで、畢生不朽の「教授学」確立の戦闘を開始する。ほかならぬ新しい、かれの「教授技術学」創出活動の出発である。

いずれにしても、かれの「教授学」の確立は、どこまでも、広く人類(人間)の救済を指向していたとはいえ、また一方にその目的は、歴史の長期に亘る、民族の苦悩のなかに生きてきた、教育を通じての同胞の救済に置かれていた。事実、かれの生まれ故郷、モラヴィア(Mähren)(チェコスロヴァキアの一州)は、ローマ法王権を背景にした、弱小民族への圧政にあえいでいた。かれの生きた時代も、いわゆる三十年戦争の動乱のなかであり、人びとは悲惨な生活を強いられていた。かれの関心は、このことを含めて、かれの場合、かれの視野の拡がりとともに、かれをして一層、より人類(同胞)の救済、そのための「教授学」確立の方向へと向わせた。

かれの主著、「大教授学」(「*Didactica Magna*」)は、このようなかれの著作意識を基層にして生まれた。かれは以上その趣旨について、以下引用のように言っている。この一点からも、かれの「教授学」確立の特質の一端がわかる。

そこで私は、ほかの人々の発明や考え 観察や勧告などはひとまずおき、事柄そのものを新しい目で (*abintegro*) 観察することに とりかかりました。つまり 学習 (*Discentia*) (テルツルリアヌスにしたがって こうよんでよいと思います) というものがもつ使命 (*causae*) 方法 (*rationes*) 方式 (*modi*) および目標 (*metae*) をさぐることにとりかかったのです。(p. 24-15)

事柄の本質を 今までもよりくっきりと取り出して示そう (これが 私の望みですが) とする・この著作は実はこうしたところから生まれたのであります。これは 初め わが国の国民に役立つように (*in gentis meae usum*) 母国語でしたためられたものですが、しかし すぐれた方々のお勧めもあり できれば広く人々の利益になるように (*ut publice profit*) ラテン語でごらんに入れるのであります。(p. 25-16)

なお上掲、Comenius 自身、「教授学」の確立について、かれ独自の着想に依るとなした経緯については、以下の引用をみれば、より理解が深められる。

コメニウスは、ボヘミア語『教授学』の・一応の完成を庇護者ポーランド貴族ベルスキー宮中伯ラファエル・レシュチーンスキ (*Raphael Leszczynsky*) に知らせる書簡の中でも、一六二七年以来 ドイツ教授学者たちの著作を研究しながら祖国ボヘミアの学校復興の方策に心を砕いている彼の中に、教授方法を発見する方法自体について ある・新しい・そして独自の考えが生まれたことを、次ぎのようにしたためております。「しかし、この点にいよいよ深く思いをひそめております間に私の心は、あの・方法の光 (*methodi illud lumen*) が驚くほど明らかになってくれます事柄を つぎつぎに考察し始めました。そして ついに私は、自分や他人の・皮相な・経験的な観察は ひとまずおき、いちばん根底にある自然から [教授学の] 基礎そのものを発掘することに (*eruendi ex ima natura ipsis fundamentis*) ほぼ三年の間腐心することになりました。新しい教授学、すなわち 敏速に 楽しく 着実に教授し学習する方法を示す教授学は、このようにして生まれたのであります」。(KJAK-P, 8-9)

(二)原理 かれは以上このようにして、結局、かれの壮大な企図、あえて「大教授学」(「Didactica Magna」)の確立を約束する。その意図はいいかえれば、それは「あらゆる人に」(omnes),「あらゆる事柄」(omnia)を教授する、「普遍的な技法」(universale artificium)の創出といっても、意味は同じことになる。その基層にある方法原理は、要約すれば、つぎの五つとされる。

(1)第一、「的確性」の原理(学習と教授において、間違いなく(certo)「的確」に、効果があがらないでは、いられないような技法原理。)(2)第二、「楽しさ」の原理(教える者にとっても、学ぶ者にとっても、このうえなく「楽しさ」(summa Jucunditas)を、感じないではいられないような技法原理。)(3)第三、「着実性」の原理(ほんとうの「学識」(literatura vera),愛すべき「徳性」(mores suaves),魂の底からの「敬神」(pietas intima)に、導かれずにはいられないような、技法原理。)(4)第四、「自然性」の原理(事物の「自然」性(ipsissima immota rerum natura)に則して、工夫された技法原理。)(5)第五、「普遍性」の原理(以上の諸原理に基き、「普遍的学校」(universales scholae)創設の基層となり得べき技法原理。)

以上これらかれの趣旨は、以下の引用についてみれば、より理解が容易になる。

私たちは あえて大教授学(Didactica Magna) いいかえますと、あらゆる人に(omnes)あらゆる事柄を(omnia)教授する・普遍的な技法(universale artificium)をお目につけたいと思います。申すまでもなく それは、間違いなく(certo)つまり 成果が現われずにはいないように、教授を行なう技法です。また それは 楽に(prompte)つまり 教授する者あるいは学習する者に 少しも苦痛や嫌悪の気持を抱かせることがなく、かえって その両方にこの上もない楽しさ(summa jucunditas)を感じさせるように、教授を行なう技法です。また それは 着実に(solidi)つまり うわべだけ見せかけだけでなく、本当の学問(literatura vera)と 愛すべき徳行(mores suaves)と 魂の底からの敬神(pieta intima)とに進ませるように、教授を行なう方法です。ところで 私たちは、これらの技法を皆 ア・プリオリに(a priori),いいかえれば 事物の・いちばん奥底にある・ゆるぎない自然(ipsissima immota rerum natura)に基づいて 示します。それは いわば、生きている泉から 流れてや

まぬ細流を導き出すのに 似ています。これをまた一筋の川にあつめて 普遍的な学校 (*universales scholae*) を建設する・ある・普遍的な技法を うち立てるわけです。(p. 20-3)

かれは上出このようにみて、あえてその実現に、文字通りの大きな「約束」を誓う。もとよりこれを、「夢物語」として受け取り、「正気の沙汰」でないともみるひともいた。しかしそれにもかかわらず、かれにとって、以上このための努力は、心から望まれる、畢生の「希望」と言えた。かれはそのことの意義をあらためて自覚し、あらゆるひとが「工夫」を凝らし、「協力」すべきであるとする。そこにはこのことに、ほかならぬ「人類全体の救い」(*Communis humani generis salus*) が、かかっているという、根本認識がかれの基層にある。その趣旨は、つぎの引用をみればわかる。

申すまでもなく、事柄はすこぶる重大です。これに人類全体の救い (*communis humani generis salus*) がかかっておりますだけに、あらゆる人の祈りがここにこめられなくてはなりませんし、また同時に あらゆる人がここに工夫を凝らし、あらゆる人の協力によってこれがひたむきに推進されなくてはなりません。われわれが国家に尽す功勞に 青少年を教えかつ啓発するよりも大きく・すぐれたなものがあるであろうか。とりわけ 現在の頹廢と憂うべき情況のもとにあっては。その墮落ははなはだしく、ために青少年は あらゆる人の努力によって正しくされ直くされなければならぬ、とキケロは申しております。ところが フィリップ・メランヒトンは、青少年を正しく形成することは トロヤを征服するよりもやや難事業である、と書きました。ナジアンズのグレゴリュウスの・あの・有名な・*τέχνη τέχνων ἀνδρωπον ἄγειν, το πολυτροπῶτατον καὶ τὸ ποικιλῶτατον τῶν ζώων*。すなわち、あらゆる生物のうち最も多彩・かつ最も複雑な人間を形成することは 技術中の難技術 (*ars artium*) である、という言葉もまた この点にかかわるのです。(p. 21-5)

(注) 本論中の Comenius の引用文は、すべて「大教授学」(「*Didactica Magna*」)  
(鈴木秀勇訳、明治図書) に拠った。